

After Leaving Mr Mackenzie における手のイメージ

押田 昊子

ジーン・リースによる長編 *After Leaving Mr Mackenzie* (1931) は、明日への出口を見いだすことのできない主人公ジュリア・マーティン (Julia Martin) が、資金繰りのために親戚知人を訪ねながら都市を孤独にさまよう物語である。その中でジュリアの手は、自分自身に「触れなおす」機会を希求しつづけている。本発表ではまず、モダニズムと関係の深い「手」および「触覚」のテーマと本作品とのかかわりを検討した。つぎに、ジュリアの手が衣服・衣裳小物を求めることに目を向け、なかでも「指輪」にまつわる描写に着目した。それにより、本作品における手が、ものやファッションとの結びつきにおいてより深く議論できることを確認した。以上を踏まえ、指輪をはめた手を触媒として、ジュリアが過去を回想し、幼い頃に自身の手が触れた先を辿っていく意味合いを考察した。

1. 戦間期のリース作品の主人公たち

戦間期のリース作品はみな、パリやロンドンを舞台に、疎外され社会の周縁に生きる女性を描く。主人公たちは帰るべき家を持たず、街をあてどなく漂う。これらの登場人物の造形には、故郷を後にしヨーロッパの都市を転々としたリース自身の姿も重なる (Lopoukhine *et al.* 1)。このため、リース批評が「流動的で固定されないアイデンティティ」に目を向けてきたことは確かである (Snaith 79)。ジュリアを“ghost” (Johnson 218) として、あるいは“inanimate world”に織り込まれた存在 (Johnson 224) として読む解釈は、その顕著な例であろう。実際に、物語の冒頭ですでにジュリアを示す特徴は「擦り落とされて」おり、年齢も国籍も一見してはわからない (Rhys 8)。過去を語る場面においてジュリア自身も、人生や自分自身が煙のように流れていき「掴めるもの」は何もないようだ、と口にする (Rhys 47)。しかし、ここで手の比喩が用いられているように、簡単に触れることのできない自身の内奥に向き合い手繰り寄せようとする試みが、作中で重ねられることとなる。つまりこの作品は、存在の不確かさにとりつかれた主人公の姿を伝えるだけでなく、主人公が手探りでその不確かさに向き合う過程それ自体を、興味深く描きだしてもいるのだ。

2. 「触れる」手

本作品とモダニズムにおける「触れる」手のイメージとの結びつきに着目してみよう。西洋の文化において触覚は、その直接性ゆえに、視覚よりもいわば下位に置かれてきた (伊藤 56)。しかし、接触に備わる「親密さ」といった価値はモダニズムの芸術家たちによってあらためて重視されるに至り、「特異な地位」を占めることとなる (高村 9-10)。また、手にかかわる職業——デパートの販売員、タイピスト、ネイリスト——に就く女性も多く描かれる (Garrington 9)。こうした仕事に携わる女性たちは、手を通じた相互関係において身体がさらされることとなり、いわば「脆さ」と隣合わせであった (Garrington 9)。リースの作品の主人公たちの多くがこれらの職業にかかわっていることは、偶然ではないだろう。ジュリアは作中ですでにモデルの仕事は辞めているものの、たとえば親しくなった青年からその手を観察されて“like a child's arm”と形容されるなど (Rhys 148)、保護や欲望の対象ともなっている。あるいはジュリア自身も、「触られる」という一方的な接触を避けている。暗闇の中で同じ青年に触れられた際は、“someone dead”の手に触られたようだと言口にする (Rhys 159)。ここからは、ジュリアにとって触覚が、他者との親密な関係と結びつくものとしてではなく、冷たく非人間的な感覚であることがうかがえる。ジュリアと他者の手の関係はこのように一方的であり、「ふれることはただちにふれ合うことに通じるという相互性の契機」 (坂部 78) から、ジュリアが疎外されていることを示唆してもいる。ただしジュリアは、触れること自体から遠ざかろうとしているわけではない。

3. 衣服・衣裳小物を求める手

モダニズム作品における手が、ピアノや自動車といった複雑な人工器官 (the complex prostheses) との接点であること (Garrington 16) も重要である。リースの作品においても、登場人物の手とさまざまな「もの」との関係が変奏される。そのときに着目すべきは、「疎外され、打ちのめされた」人物が登場するリース作品においても、「もの (material things) の力を借りる」ことによって「喜び」といった感情が描かれうるという点である (Oulanne 86)。たとえば、新しいドレスを買いに行きたい思いに駆られるジュリアは、自分の「手」が黒いドレスからのぞく時の心地を想像する (Rhys 14)。この時代のファッションが女性に希望を与える楽観的な役割を担うだけではなかったことはもちろん無視できないが (Plock 97)、この場面からは、幽霊のように希薄になった自身の輪郭を、ジュリアがドレスによってなぞろうとしている様子もうかがえるのである。

このように、ジュリアの身体はものを手がかりにしながら、小説内でもがきながらも確かに息づいている。そして、ジュリアが「もの」の力を借りる様子をもっとも顕著に伝えるのが、「指輪」というまさに「手」に直接的にかかわるモチーフである。母親の葬儀後、ジュリアは妹から形見として指輪を手渡される (Rhys 127)。ジュリアは、他者と真に触れあうことの困難に直面する一方、ものやファッションに触れながらそれらと親密な関係を築く。それは、それでもなお世界と触れあいたいというジュリアの身振りを示すものでもある。

4. 自己に向き合う手

故郷に戻ったジュリアは、病床に横たわる意識のない母親と対峙する。母親との関係が必ずしも良好ではなかったことも作中で示唆されているが、ジュリアはその手にそっと触れる。しかし、母の手に触れるものの、自分の「心が死んでいる」と感じることはできない (Rhys 92)。一方それと同時に、部屋のなかに「素晴らしい沈黙」があることを噛み締める (Rhys 92)。ジュリアが他者と相互的に「触れあう」ことに困難を抱えていることは前述したとおりだが、ジュリアが求める先が、自分のうちに広がる世界との接続であることがここで示唆される。現実の世界で「触れ合う」ことのできないジュリアはこの後、記憶の中の手を思い起こしながら、自分に向かって“you”と親しく語りかけることとなる。

母親の死後、小説も後半になり、ジュリアは部屋の中で子どもの頃を思い出す。そのきっかけとして、現実では触れあうことのできなかつた母親の形見の指輪に目を落とす。「自分にはきつく感じられる指輪 (the unaccustomed ring)」 (Rhys 152) は、自身の手の感覚を呼び起こすようジュリアを促しているようである。その後、“HOW FAR BACK could you remember?” とジュリアは自分に問いかけ、記憶の中の「小道 (the path)」を歩き、自然の中で遊んだ幼い頃の一日に戻っていく (Rhys 152)。ジュリアは、木の幹に触れたときの安らぎについて、「触れることでその生命を感じることができた」のだと追想する (Rhys 152)。また、「子どものころ、あなたはあなた自身だった」と、自分が自分らしくあった頃を思い返す (Rhys 152)。そして、自由に羽ばたいていた蝶をそっと手で捕まえた時の手の感覚をゆっくりと呼び起こすことで、自身の感情の来し方を再び手で包むように確かめるのである (Rhys 153)。

5. まとめ

幼い頃の記憶の中の木や蝶をめぐる挿話は、ジュリアがさらされる現実の世界の冷たさと、かつて触れあいのあった過去の世界との隔たりを示しているとも考えられる。しかし、手をめぐるジュリアのこうした回想の時間は代えがたいものである。この回想の時間は、他の登場人物には計り知れないものとして描かれている。その日何をしてたのかと尋ねられたジュリアは、何もしていなかった、ベッドで子どもの頃のことを思いだしていただけだ、としか答えない (Rhys 154)。ジュリアの内に残された手の感覚は、人目に触れず、ジュリア自身も言葉にすることのないまま守られる。「触れる手」の経験は、読み手にのみ手渡されているのだ。

After Leaving Mr Mackenzie においてリースは以上のように「手」を重層的に描き、「触れる」ことがジュリアにもたらす終わらない問いかけを共有するよう、読み手を導いているのである。

引用文献

- Garrington, Abbie. *Haptic Modernism: Touch and the Tactile in Modernist Writing*. Edinburgh UP, 2013.
- Johnson, Erica. “‘Upholstered Ghosts’: Jean Rhys’s Posthuman Imaginary.” *Jean Rhys: Twenty-First-Century Approaches*, edited by Erica L. Johnson and Patricia Moran, Edinburgh UP, 2015, pp. 209–27.
- Lopoukhine, Juliana, Frédéric Regard and Kerry-Jane Wallart. “Introduction: On Reading Rhys Transnationally,” *Transnational Jean Rhys: Lines of Transmission, Lines of Flight*, edited by Juliana Lopoukhine, et al., Bloomsbury Academic, 2022, pp. 1–12.
- Oulanne, Laura. *Materiality in Modernist Short Fiction: Lived Things*. Routledge, 2021.
- Plock, Vike Martina. *Modernism, Fashion and Interwar Women Writers*. Edinburgh UP, 2017.
- Rhys, Jean. *After Leaving Mr. Mackenzie*. W. W. Norton & Company, 2020.
- Snaith, Anna. “‘A Savage from the Cannibal Islands’: Jean Rhys and London.” *Geographies of Modernism: Literature, Cultures, Spaces*, edited by Peter Brooker and Andrew Thacker, Routledge, 2005. pp. 76–85.
- 伊藤亜紗『手の倫理』講談社、2020年。
- 坂部恵『「ふれる」ことの哲学——人称的世界とその根底』岩波書店、1983年。
- 高村峰生『触れることのモダニティ——ロレンス、スティーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』以文社、2017年。